

「ろうの看護師と専門性」

医療福祉ジャーナリズム分野 修士2年 今岡 康子

「ろう者は、ろう者の支援が必要だと思った瞬間があった」というお話に、とても共感しました。

現在、大学院の研究で、がん体験をした看護師にインタビューをしています。以前、「体験者や当事者でなければよい看護は出来ないのか？」と聞かれたことがあります。

医療の基礎教育では、SP（模擬患者）を使って、シミュレーションやトレーニングをすることで症状に対する形式的な観察は出来るようになると思います。

しかし、実際に自分が患者になってみると、それだけでは不十分なことがよくわかります。

「よい看護」とはケアの受け手が感じることなので、提供する側が判断するのは難しいと思いますが、医療者が患者として医療を受けるなかで感じた、つらさや苦しみなど様々な感情は体験した当事者にしかわからず、その体験を当事者から聞くことで、当事者でなくても、理解し、配慮することは出来るのではないかと思います。

医師より「塩分を控えるように」という説明を、「塩、等、注意」と大まかに通訳することで、ろうの患者さん自身も患者さんなりに自分で解釈して、生活し、血圧のコントロールが出来ず、症状が悪化してしまったという事例を聴き、医師の説明をそのまま通訳するだけでなく、医師の説明から、さらに日頃の食生活や食習慣から何をどのように食べればよいのか、注意するとよいのかといったことを、医師と患者さんの間に看護師が入り、伝えることが必要だと思いました。専門用語を患者さんの生活に合わせて解釈して伝え支援する。それが「看護師の専門性」なのだと思います。

ろう当事者の方が言葉が通じないことを理由に受診をためらったり困ることがないように、後に続く、ろう当事者の専門職が増えてほしいと思いますが、看護師になるために大学受験や面接、就職が大変だったように、医療者、特に看護師のほとんどは若くて健康な人を中心に構成されています。しかも、ギリギリの人数のために簡単には休めない状況のなかで、時間も精神的にも余裕がなく日々忙しく働いています。そして、妊娠や病気など様々な理由で、その規格から外れてしまうと、非常に働きづらくなってしまいます。

ろうも含め、様々な当事者を受け入れた多様性のある専門職が増えることで、同じ当事者の患者さんの生活者としての目線で、共感し、より配慮できるのではないかと思います。また、様々な能力や知識を持つ人として、受け入れることの出来る寛容さを持てる職場であってほしいと願っています。

去年は、愛さんのお母さまより「ろう文化」やろう者にも多様性があることなど、多くのことを学びました。そして、今回は、看護師として医療者から見た、病室のプライバシーの問題、点滴は利き腕でない方にするとといった具体的なことを聞くことで、新たな知識と発見があり、これから、ろうの方と関わる機会があれば注意し配慮していきたいと思います。

今回もとてもたくさんの方のアドバイスをいただき、良い学びになりました。ありがとうございました。

そして公私ともに、これからの益々のご活躍に期待しています。